津奈木

発行所
津奈木公民館
芦北郡津奈木町
電話（津奈木）24番
編集人　岡松　壮
印刷所　緒方印刷所
八代市通町
電話（八代）代表3118番

食と健康長寿

医学博士　近藤正二

紹介

新潟県出身、東大卒、ドイツ留学二年後東北大教授　医学博士　体格の向上と長寿の研究では日本一、沖縄人の体格が最劣等だったものが、今日、鹿児島県をもしのぐようになったのは実に先生の力、また日本に散在する短命村が、だんだん長寿村にかわってゆくことも。七十四才）

はしがき

近藤先生が日本老年学会で発表されたときのパンフレットから抄録したものです。（たまたま五月十一日に突然赤崎に調査にこられ老人会や婦人会幹部の二十人近い人に一時間ばかりお話し下さった。

本町でも蜜柑栽培に集中するあまり、野菜作りを忘れるきらいがないでもない。先生は青森県でリンゴを野菜畑にまで植えて短命村になった話、八丈島の長命村が換金作物栽培一辺倒となって短命村に変ったなど赤崎で話された。

蜜柑耕作者のみならず、一般にも参考になろうと思い、長文をいとわずのせることにした。

長寿村と短命村

（欧米の文化国では満七十才以上の長寿者が人口の六〜七%であるのに日本は四%ぐらい）

日本は短命国であるが、全国一律に短命ではない。地方により長寿者の多いところもある。

そこで私たちは、全国すべての地区にわたり、長寿者のとくに多い村や少ない村をさがして、実地調査を行ない、気候・地理的条件生活条件（とくに現在の老人たちの若い時代からの食生活、労働、飲酒、飲料水、迷信など）について比較検討しているが、結局長寿者の多いか少ないかにもっとも大きな因果関係をもつものは、**それぞれの郷土に行われてきた旧来の食習慣であることが初めて明かになった**。実は秋田県が脳卒中が多く日本一の短命国であるのは、ドブロクを飲むためだという説が行なわれていたので、秋田・高知県を初めとして、広く飲酒で定評のある村をさがして実地調査したが、酒が住民の長寿や脳卒中との間に格別の関係のないことがわかった。

また、重労働が早老短命にするという説も行なわれているので、重労働と定評される村や部落をさがしてすでに多数調査したが、重労のために短命になったと認められた実例は一例もない。

長寿村・短命村の食習慣

いままで二十八年間に約八百五十村を実地調査したが、それによって知りえた多くの事実をありのまま要約したところ、郷土の食習慣と住民の長寿との間に次のような因果関係のあることが確認された。

①米偏食大食の食習慣のところは必ず長寿者が少ない。

住民が一般に早老であり、脳卒中による若死が非常に多い。東北地方、とくに秋田県の米作村はその好例で、四十才ごろから脳卒中が多発し、また六十才ごろから農作業をやめるのが常識である。ここに重要なことは、米の大食には必ず食塩の過食が伴なうという事実である。

②魚を大食して野菜不足のところは必ず短命である。そしてとくに心臓疾患による若死が多い。

隠岐（オキ）は全国一に長寿者が多く、壱岐（イキ）もそれに次いで長寿であるのに、対馬（ツシマ）は長寿者がいちじるしく少ない。対馬は全島ほとんど山で、しかも石が多いので耕作地が少ない。魚にめぐまれているので、野菜不足で魚を大食している。食生活は壱岐のワタラ村で、他の部落がいずれも長寿者が五〜七%であるのにただ一つコサキ部落だけが長寿者が少ない。（三・二%）コサキ村は昔から畑を全然もたない部落で、漁業専門で魚を大食して野菜不食の食習が行なわれてきたところ。

赤崎会館での先生のお話。あまり火急で、たくさんお集まり願えなかったのは残念でした

財政の話

助役　松原兼義

しからばこの社会資本を造成するための経費は、現在どんな方法で捻出するかをながめてもらいましょう。

歳入すなわち必要な経費は、事業の性質によって多少異なるが一般的のものをあぐれば㈠、国の補助、㈡、県の補助、㈢、借入金、㈣、寄附、㈤、自主財源等に大別される。

尚詳述すれば、補助には国だけの補助の場合と、単県補助といって県のみの単独補助の場合もあるが、現在大部分は国の補助に更に県の補助をつけてもらう両立ての仕組みになっている。

最近地方自治の諸問題の中で「三割自治」という言葉が、ちょくちょく出る。端的にいえば貧乏財政ということの表現であろうか。御粗末な例だが、仮り歳出一億の場合、純財源すなわち自主財源が三千万しかなく、他の七割はなんらかのかたちで国や県やその他に依存しなければ町財政の切り盛りが不可能という意味である。

さて本町の場合はどうかを略述してみると、四十二年度の当初の予算から例をあげるのは一寸酷だが。一般会計の歳出総額一億二千九百万に対し、町税や財産収入、使用料、それに繰越金まで入れて二千四百十六万にしか達しないので、この比率から申せば「一割八分自治」となり、他の八二%は他力本願式の依存財源となる。まことに貧困の上に超の一字が加えられる情けない話になる。ある相当な知識人曰く、町有林が津奈木には何百町もあるじゃないか、ゴト山の横や後の杉山はゆきゆきしとる、あそこだけでも何億円もあるばいと、なかなかの楽観論である。一応うなずける意見だが大変な見当違いである。多分大字津奈木の龍岩と土金のことだと思うがかの土地は町有地に国すなわち営林署が植えたもので、俗にいう官行造林になっている。分収率は町が五分、国が五分。それを又町の分は地元組合が六分、役場が四分、けっきょく総額の二割しかはいらない。売上額一億とすれば二千万という勘定、一年分の五分の一にも足りぬ。

現在熊本県民所得は全国でも下位の部と聞く。更には天草郡を初め、球磨、芦北郡は県下の低所得層、そのまた芦北郡でも津奈木の財政が一番びりとあっては情けない話である。こゝで手をこまねいてはおれない。少ない財源を有効に活用し他市町村を追い越す手腕を発揮する妙手は次号に

アッ!!あぶない!!そのスピードが死をまねく
のんだらのるな、のるならのむな

津奈木の歴史

千々岩頼母

今年は孝女千代が生れてから三百年になりますので、その記念に十一月頃何かの会を持つ様にしてはとよりより話をすゝめています。千代塚の千代の碑は前にも書いた様に、徳久美貞という当時津奈木の総庄屋をしていられた方が建てられ、久貞さんの次の代の茂十郎さんは、千代塚の四角な碑を建てられ、蘇峰先生のお父さんの淇水先生は、大島桜を植えたり、橘是容さんの作られた文を書いておられます。

蘇峰先生も『純心不朽孝女千代之墓』の碑を建てられ、また松の植えつぎや銀杏の木を植えたりしておられます。徳富家と千代塚はたいへんゆかりが深く、蘇峰先生も千代塚をたいへんなつかしがりまたたつとんでおられました。

今から八十年も前に（明治二十二年）に民友社から国民叢書が発行され、その中に孝女千代のことを書いておられます。今から八十年も前の文章なので、今の文章とは少しちがったところがありますが参考のためその一部をかゝげて見ます。

（前略）「芦北三太郎の最後の一を津奈木太郎という、上下一里に余るべし。下りてその麓に近づけば、帯より狭き間をさぐり、玉より浄き岩清水珊珊として街道に沿うて流れ、高さ百尺にもこゆる老杉帆柱の如く天を刺し、濃陰重々翠なす色は、夏も日影を漏さぬ程なれば、難路に悩める旅客は、道ばたの石に腰打かけ、彼等のためにも生命の泉とも覚ゆる谷の清水をくんで、枯腸を湿し、木の間より吹き来る涼風に汗を乾かし、無限の慰楽に入るなるべし。こゝより数歩を転ずれば、七、八株の老松龍の天に沖らんとして群る如く、街道の左右に乱れ立つを見る。而して其の下に二個の石塔あり、一は平面なる自然石にして、他は長方形の切石なり。自然石は古くして少しく太く、切石は新にして少しく小なれど、共に普通の太さにして、別に人目をひくものにあらず。自然石は即ち孝女千代の墓にして、苔蒸せる墓陰を模すれば、天明某年県吏徳富某建之の字ありありと現わる。即余が大祖父君の碑にして、切石は亦余が外曾祖父が天保年間に建て給ひしものなり――。

（千代女の事は次回に）

先生方の異動

転出

学校名	氏名	転任先
津奈木小	緒方　軍紀	丸米小長
〃	尾上　清子	内野小
〃	西村　悦子	水二小
赤崎小	吉田　秀祥	退職
〃	山下　茂	天草嵐口
〃	田河　慶子	内野小
平国小	福島　季任	内野小長
〃	谷口　哲郎	久木野小
〃	中道慶竜	退職（進学）
津南中	白石　粲	古石小長
〃	平井徳子	宇土網田中

転入

津小	今田　吉一	白木小
〃	鶴野　ミネ	水二小
赤崎小	千々岩　護	水東小
〃	前田　定邦	水一小
〃	小森サエ子	水二小
平国小	上田　健	海浦小長
〃	宮崎　健三	計石小
〃	塚本　宏	教育大
津南中	宮田　恵美	日体大

農地の売買をつぶしたりするときは

農地（田、畑、果樹園等）を売買したり、あるいは農地をつぶして他の目的（宅地、山林等）に利用するなどのときは、知事の許可をうけなければなりません。

これらのきまり（農地法）に違反すると、三年以下の懲役、または、十万円以下の罰金など、罰則もさだめられておりますので、つぎのようなばあいは、（まだ手続をとっておられない方も）すぐ農業委員会で手続をとってください。

記

一、農地について、所有権を移転（売買、贈与）したり、またはかりて耕作しようとするばあい

二、農地を農地以外のもの（宅地山林、道路等）に、しようとするばあい。

三、農地を農地以外のものにするために所有権を移転したり、かしかりを、しようとするばあい

なお、そのほかくわしいことは、農業委員会にご相談ください。

よろこび

講口よしの

おとなりの千々岩先生が「読書グループで本を借りることができますが」とおさそいをうけて読み始めてから、もう一年近くもすぎた。今日も有難く読ませていただいている。

さて感想を書くとなると、古びた頭の中に残っていることは、一冊の本の只一行のことがらにすぎない。

でも、そのビビたるものでも、自分のものになっていることにはほほえまずにはいられない。

農村のかたい殻の中で、見聞に乏しい私の良き指導者である読書は、心の苦悩もほぐし、知識も広めて何よりの先生となって、今では切りはなせない支えである。

一冊の本の中の一つでも自分のものにしようと、例えば、花壇の造り方の本を読むと、ありあわせの資材でママごとみたいに造って見る。和裁の本を読んでは自信のないコートを作ってみる。又処世の為めになることは人に話してみたりすると、案外聞いた人も喜んでくださって、有難く思っています。

一日に二十分間でもいい、読む習慣をつけておくことは、有意義な時間を見出すだけでも何よりの収かくである。

又高価な本など買うことは、食べてゆくのに精一杯の私には、無料で読ませていただくことが、まことに有難く、ただ合掌せずにはおられない。

老境にさしかかっている私にとって、読書こそ無音のまま力強き支えとなってくれている。そして又、生活にまずしい私を、寸時でもゆたかな心によみがえっして明るい希望へとさそって行ってくれる喜びを有難く感謝している。

五の日は税の相談日

税金のことは、どんなことでも知っていて損することはない。

わが国の税金のほとんどが、自分の税金は自分で計算して申告するたてまえになっている。（申告納税制度）

ところが自分で書こうとすると、むつかしくてペンが進まない。とうとう名前と住所だけ書いて、片づけてしまうというのがおちである。

このような方の疑問や質問にお答えするために、税務署では毎月五日十五日二十五日を『税の相談日』ときめて、みなさんのご相談をお受けすることにしている。

『税務署へ税の相談に行くことは鳥が猟師のふところに飛び込むようなもので、かえって税金が高くなろう』と心配されるかもしれませんが、ご心配ご無用、八代の税務署でなくても、鹿児島県内の税務署に行かれてもよい。（全国の税務署のどこでも）――

もし、五の日が都合の悪かったらその外の日でも結構。

（八代税務署）

行政相談は

福田信順

津奈木町担当の行政相談委員として福田信順氏（岩城一六六六）が昨年に引き続いてふたたび委嘱されることになり、四月一日付をもって行政管理庁長官（国務大臣松平勇雄）より発令されました。

行政相談委員は、皆さんが国の行政、例えば恩給、年金、登記、保険、生活保護、農地、郵便、道路、交通、公営住宅、河川、公害その他国鉄、専売、電々公社、公団などのことについておこまりになっているばあいやおわかりにならないばあいに、親身になってご相談に応ずることになっていますので、このようなばあいにはご遠慮なく福田行政相談委員へご相談下さい。ご相談の内容によっては、お名前など秘密の保持には遺憾のないようとりはからいます。

ただし、裁判中の問題とか、民事、刑事問題、政治問題はとりあつかいません。

ご相談は個人でも団体でも結構です。また、形式ばった手続きもいらず、料金も一切無料です。

青年の持てる力を結集して

青年団長　林　守

去る三月三十日の役員会で前団長石田恒義君の後をうけて団長となったのでありますが、何分不肖で、学問も浅く、教養もいたらないものでありますから、団長の重い務めができるか自分自身あやぶんでいます。

前団長が平素なげいていたことそれは青年団員が少ないことです。それで私が団長になって、第一になさなければならないことは、その津奈木町に残っている青年諸君を、青年団に入ってもらうようにすることです。それには魅力ある仕事を、みんなと話合ってきめることと同時に、青年諸君も自分一人ではなんにも出来ないことをさとってもらいたいものです。

私も団長になった以上、できるだけのことはしたいと思いますので、町民のみなさんのご指導とご協力をお願いいたします。

津奈木町の発展は、私たち青年の望みであり、喜びであります。そこで津奈木町の発展に協力することは、やがては私たちの発展とつながります。

青年のみなさんのご協力と、町民のみなさんのご支援をお願いしましてご挨拶といたします。

知事表彰

ひばり地区

昭和四十二年五月八日、県庁大会議室で開催された熊本県農業構造改善事業大会において、地域開発の優良団体として、**赤崎のひばり生産組合**が表彰された。

尚、当日写真コンテストに出品した写真は、市町村の部及び個人の部で、いずれも佳作に入賞、県庁ロビーに展示された。

四月二十八日

町会議員選挙

十八議員誕生

去る四月二十八日の選挙で次の人々が当選されました。―届出順

浜本　喜楽　山崎　好
原田　繁信　諫山　繁敏
川崎　一幸　浜田　安光
沢井　武市　諫山　保澄
福島　円太　山口　享子
伊藤嘉次郎　福山　義人
永田　肇　永里　吉香
西　保徳　寺本　一喜
福村　広人　福田　正任

―●―

五月六日第一回の町会で次のように部署が決まりました。

議長　福村　広人
副議長　福山　義人
総務常任委員
委員長　福島円太
副委員長　永田　肇
委員　浜本喜楽
福山義人　諫山繁敏
山口享子
教育厚生常任委員
委員長　諫山保澄
副委員長　永里吉香
委員　川崎一幸
伊藤嘉次郎　浜田安光
土木経済常任委員
委員長　山崎　好
副委員長　福田正任
委員　沢井武市
西　保徳　寺本一喜
原田繁信
監査　永田　肇

昭和42年4月28日執行町会議員選挙投票者数及び投票率

投票区	有権者数			投票者数			投票率		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1（染竹・竹中・中尾 桜戸・浜崎）	430	566	966	414	533	947	96.3	94.2	95.08
2（新川・古川・町中）	263	327	590	244	311	555	92.8	95.1	94.07
3（古中尾・倉谷）	186	207	388	178	194	372	95.7	93.7	95.88
4（上下門 内野・川内）	181	221	402	166	208	374	91.7	94.1	93.03
5（小津奈木）	98	124	222	93	120	213	94.9	96.8	95.95
6（大泊）	147	167	314	139	160	299	94.6	95.8	95.22
7（赤崎）	350	432	782	321	416	737	91.7	96.3	94.25
8（平国辻）	255	285	540	237	276	513	92.9	96.8	95.00
9（福浦）	99	88	187	94	85	179	94.9	96.6	95.72
計	2,009	2,412	4,421	1,886	2,303	4,189	93.88	95.48	

よい勉強になった

倉谷　前田ジノ

私は青年の家の研修とはどんなことだろうと思いながら家を出ました。行ってみますと、あのすばらしい阿蘇の広原に、何という大きな立派な国立青年の家が立っているではありませんか。そうして入所してみますと、各地方からの団体と一しょに寝食を共にして、何もかも一つ一つの行事が規則正しい生活であるのに感心しました。そのキビキビした生活の中に、夜はたのしい夕べのつどい、またキャンドルのつどい、私たちは年令も忘れて若い青春時代のように各地から来られた若人たちと一しょに、歌をうたったりおどったり、体操をしたり、ほんとうに楽しい一日でした。

一日の行事が無事にすんで自分のベッドについた時「ほんとうに来てよかった」とつくづく思いました。

家にいるときには、仕事のいそがしさにおいまわされて、ラジオ体操もしたことのなかった私が、若い人たちの集団のなかにまじってやれば上手にでき、大正生れの私たちもやればできるのだと思いながら眠りにつきました。

この規則正しい生活をいつまでも忘れず、わが家でも実行したいと思います。

子供が大きくなりましたならばぜひやりたいと思います。

思い出深いたのしい一日をすごさせていただいてまことに有難うございました。よい勉強になりました。厚く御礼申し上げます。

食と健康長寿　続き

③長寿村では必ず魚か大豆を常食し、その上必ず野菜も十分食べている。長寿者の多い隠岐では、米はほとんど作らないが畑は多く、魚にめぐまれ、大豆もよく食べている。山梨県で富士山北ふもと鳴沢村はトウモロコシを主食とし、魚はほとんど食べないが、県下第一の大豆名産地で、日本一味噌を多く食べる村である。（大豆が多く塩の少ない味噌）ここも有名な健康長寿である。北海道の漁村は、野菜不足で魚を大食するところが多く、長寿者が少ないが、長寿者の目立って多い村もある。そこは必ず畑も作って野菜をよく食べてきたところである。

④海藻常食のところは脳卒中が少なく、それだけ長寿者が多い。

日本一脳卒中が多く、日本一長寿者の少ない秋田県で、ただ一つ長寿村がある。ここは県下でただ一つの海藻常食村で脳卒中がない。岩手県も脳卒中の多い短命村であるが、宮古釜石あたりの沿岸は、東北地方では脳卒中のもっとも少ない長寿地帯である。それが海藻常食地帯と完全に一致している。

大高原の中に、仕事から、家庭から、身も心も開放された明るい顔（阿蘇青年の家にて）

長寿者の男女差

長寿者率を性別にみると、日本では大体男二に対し女三の割で、長寿者は男より女に多い。しかしそれが何に由来するかは、諸説が行なわれているが、この問題についても、日常食生活が意外に大きな関係をもつことを実証する事実が見られた。

石川県は全国的にみて、長寿者率の男女差がもっとも大きい県であるが、とくに江沼、能美郡あたりには、男女差が大きい村が多い。このあたりでは、昔から男は食べ物に好き嫌いを遠慮なく発揮するのに、女は食べ物を粗末にしてはもったいないという心から、食事の残り物もみな食べて始末する風習があり、種々の物（南瓜・ニンジン・芋なども）を万べんなく常食していることがわかった。

一方岡山県の津山の東南方の農村地帯は、長寿者率が男女同等という珍らしい村が多い。そこでは同一家庭で男も女もまつたく同じ食べ物を食べる風習が昔からつづいている。

労働が早老短命にするか。

重労働が早老短命にするという説が一般に強調されているが、私は全国各地方で、とくに重労と定評される村や部落を多数実地調査したけれども、労働のために早老短命になったと認められた実例は一つもない。そこは労働ははげしいけれども、食生活が内容的に健康長寿にかなっているのが常である。

岡山県長浜村や静岡県南崎村は「娘を嫁にやるな」といわれる重労で粗食の村であるが、それぞれ県下で第一の長寿村である。長浜村は田が少なく、畑を高度に利用して各種の作物を作って（とくに南瓜）食べる上に、海藻や小魚もよく食べるところである。

総括

三年ほど前、私はハワイにいって日系人の発育・体格や長寿に関する調査を行なったが、一世には健康長寿者が多いのに、いま四〇～五〇才という働き盛りの二世が（体格は断然大きいが）心臓病で親より先きに死ぬという例が頻発しているのにおどろいた。

日常の食生活をみるに、一世は肉の食べ方が少なく、野菜を豊富に食べ、豆腐海藻など好んで常食しているのに、同一家庭でも二世三世は野菜不足で肉をおどろくほど大量に偏食大食している。近年結核死亡者は著しく減ったが、結核患者は依然多く、それに脳卒中や心臓疾患による若死が多いのは国の重大事である。それを防止する根本策が必要である。食生活改善の重要性を再認識すべきときである。

日本人の食生活の在り方

(1)**米の偏食大食を止める**
(2)**肉・魚・卵もしくは大豆を毎日十分食べる。**
(3)**野菜は多く食べる。**（とくにニンジン・カボチャ・芋も含めて）塩味はひかえめ、果物に依存して野菜を忘れぬ。
(4)**油を少しずつ毎日食べる。**
(5)**海藻を常食する。**
(6)**なるべく牛乳を飲む。**

いねむり運転せぬよう十分休養をとろう
とび出すな車は急にとまれない

婦人会研究記

国立阿蘇青年の家

研修日記

（浜本繁巳）

五月九・十の二日間、国立阿蘇青年の家で、初の婦人会研修会が行なわれた。泊りがけの研修は婦人会にとって始めてである。各部落からの代表者四十九名、研修の成果を期待しながら午前八時予定通り役場前を出発した。青年の家での研修目的は、規律正しい共同生活をしながら、講義・討議ならびにレクリエーションなどにより新らしい教養を会得する為だった。一日に四〇〇名が宿泊し、全員が一しょに食事のできる大食堂、十何室もある研修室、大体育館など、これらの施設で、当日の研修生五団体三八四名とともに規律正しい共同生活を行うこととなった。十三時、大分県直入町婦人会との共同研修をはじめ、菊池郡市4Hクラブ員との合同研修、夜は午後七時三〇分から阿蘇の灯をかこみ、三八四名の研修生がいりみだれてわが年をも忘れて歌い、踊る姿は実に楽しい研修のひとときであった。食事・消灯・起床・朝のつどいと規則正しい生活。

翌日の研修では活発な意見がだされた。①部落婦人会を強化するため部落毎の研修会を行つては、②壮年男子の研修する機会を与えるべきだ。③青年団との合同研修を行なってもっと公民館活動を活発にしてもらいたい。④規則正しい生活をするためおたがい時間を守ろう。など積極的建設的な意見である。全体会では、今回の成果を語り合い、踊り合う姿は、実に明るく楽しげで、本当に研修に来てよかったことをものがたっていた。

今度、阿蘇の青年の家で学びえた、とうとい体験を、今後の家庭生活に、また婦人会活動に、地域社会の発展にいかしていただけることを念願するものである。

最後に、この研修に特別のご援助とご協力をいただいた農業協同組合長さんはじめ、みなさんに研修生一同と共に心から感謝を申し上げる。

感激とよろこびに胸ふくらませて、そしてまたなつかしい思い出の青年の家を去るあわい哀愁をもこめて　――うしろは青年の家

研修を家庭に生かす

古川　浜本スミ子

九日の国立阿蘇青年の家研修会には、前日からの痛む腹をおさえて参加しました。

夕べのキャンドルの集りには阿蘇山からの火をむかえて、各地から集った若人たちと一しょに手をとり、母も忘れ、二十も年を捨てて、踊り歌いました。

おごそかな螢の光の歌声の中に阿蘇の火に別れを告げ、各自の部屋にかえり、定められたベッドに入り、静かな夜の中にとけこみ、いつしか眠りにつきました。

翌朝六時半起床、寝具をキチンとたたみ、外に出たしゆんかんすがすがしい気持となり、腹のいたみも知らぬ中によくなっていました。

大阿蘇に向かって国歌と共に国旗掲揚、つゞいてラジオ体操

二日目の研修をうけ、中食をとりながら、前日も体の調子がよかったらまだまだ愉快な研修だったろうと思い、こんなよいところにはできることなら、年に二三度来たいなあと思い、また部落の人にも一度はぜひ行ってもらいたいものだと思いました。

家庭に帰ったら、きまり正しく起き、正しく夜具を片づけ、ラジオ体操、食事がすんだらお茶わんも持って下りるよう家族のものと話合いたい。まだそこまではやれずにいますが、きっと実行にうつします。ほんとにこの度の研修会に参加さしていただいて有難うございました。

加多里津奈木
誉れの米俵

お千代菩薩（最終回）

矢野洋三　作

千代、祖父「ハツ」と平伏する代官去る。庄屋も従う。千代、祖父と平伏している。
庄屋、あたふたともどつてくる。千代の耳に何かささやく。
千「え、ご褒美!!え、米、え、十俵!」
庄「よかったのう千代。そなたの孝行に花が咲いたのじゃ、間もなく村の衆が運んでくるでのう」
千「はい!!」
庄屋、代官のあとを追って去る
千代「お祖父さん!」と祖父の手を執って泣く。
千「嬉しか嬉しか有難か有難か」
祖「何ば独りで喜びよっとか、わしにも早よ話さんかい。庄屋さんの何ば云わしたとかい」
千「あのな―下だはるげな」
祖「何ばや」
千「米ば」
祖「誰れがや」
千「殿さんの」
祖「何ばや」
千「米ば」
祖「何ぼや」
千「十俵」
祖「ええっ!一俵もや!」
千「一俵じゃなか、十俵!」（と両手を拡げて）
祖「じ、十俵!?」
千「それも毎年十俵下はるげな」
祖「え毎年十俵!」
千「え　十俵!」
祖「ほ、十俵」「え、え、え」「ほ、ほ、ほ」くりかえす。と二人両手をひろげて踊る手つきになる。
千「祖父さん!」
祖「千代!」
二人ひしと抱き合う。
千「お祖父さん。永いこつ、菜っぱ飯ばかり食わせてすまんじゃったな」
祖「何の何の、お前こそ、豆腐のおからばっかりいつも」
千「え……お祖父さん、知っとんなはったとな」
祖「知っとったとも、おらあな、いつも拝んで頂いとったっぞ」
遠くわっしょいわっしょいの声近ずく。
米俵をみ輿のようにして、子供村人それをかついで登場。俵を三つ重ねて一組に、それを三組と一俵だけを一組、それぞれに旗が立ててある「御褒美米」と。
村人「わっしょいわっしょいそれきたわっしょい、千代に八千代にお目出たい。鳥はこうこう雀はチョチョ。お米のみこしだ、わっしょいわっしょい!千代に八千代にお目出たい。鳥はこうこう雀はチョチョ、それゆけ、わっしょいわっしょい。わっしょい。
村「お千代さんや、殿さんからの御褒美米が届いたぞ、まずまず鎮守さまにお供えしょうな」
千「弥吉おじさん、私たちがみんな貰らっちゃもったいない。あの一俵だけでも今日祭のお祝にみんなで炊いて食べて下さい!」
村「え、本当かい、わあい!米の飯が食えるぞ」
村A「俺あ米俵見ただけで腹が一ぱいになったようじゃ」
村B「そーれ、先ずは鎮守様に繰り込め!目出たいこっじゃ、有難いこっじゃ、こりや村の誉ればい。孫子の代まで語りつなぐこっじゃ。」
一同にぎやかに去る。
祖父と千代うれし涙を拭く。
千代、母の形見の櫛をふところより取り出し、じっと見つめ、
千「お母さん!!」
と櫛を抱きしめる。
祖父ひざまずいて鎮守の森に向って合掌する。祭ばやし、太鼓遠く聞える。静かに幕。
おわり。